２０１３年８月１１日（日）　学習会　交流会

小高区の三浦広志さん。農民連所属。原発から１２キロ離れたところ三崎橋の近くで、米を作り、アイガモを飼い、野菜などの無農薬農業を２０年ほど続けてきた。ところが、津波と原発事故ですべてが休止。いまは２ヘクタールの米、ハウスでほうれん草など野菜の栽培を始めたところ。

３月１１日２時２６分、震度６強の地震が６分間続き、相馬市から避難し、車中で過ごした。

３月１２日には浪江町の人が逃げたらしいという話を聞いた。福島原発が爆発した、ベントしたという情報があり、相馬市のアリーナに避難。しかし、放射性物質を含んだ雪の降る中を避難してきた被曝者を近づけようとしない。そこで小高商業高校へ行くことになった。寒くて震えているお年寄りがいるのに職員が毛布を配らない。避難者がみんなそろわないと不公平になるからだという。一週間着ていたコートからは１５０００ベクレルの放射線が検出された。

農水省に補償と補助金を申請するために現地を見に来てくれと要請したが、国家公務員は労使協定で危険なところには行けないという。

いま、復興のために必要な資金の半分の４０００万円をもらって、土づくりから始めている。「ノマド」遊牧民という意味だが、野馬土、野窓のごろ合わせ。ジャガイモ掘りをしたが、「風評被害を吹っ飛ばせ」を合言葉に活動している。

２０キロ圏内ツアーをやって原発の現状、実状を見てほしい。そして、他の原発も抜けるうちに燃料棒を抜いてほしい。

農民にとっては、農業をやりたいのにできなくなることが一番つらい。

ひまわりなど植物で放射能を吸着させようという説があったが、効果がないことがわかった。わたしは使えなくなった農地に太陽光発電のパネルを置こうと思っている。

松川浦で漁師をしている石橋正裕さん。３月１１日には５０００～６０００万円する船に乗って漁をしていた。地震の次に津波が来ると思って沖へ向かった。４０分くらいしてから、壁のような波が来た。それが三波。数十メートルの波に向かって走らせて乗り越えた。次に返し波。その時には逆向きに船を走らせた。その後、船の上で２～３泊。電話もつながらず不安だった。ワンセグで状況を知りもどってみたら港がなくなっていた。陸に上がってみたらガレキと死骸。家もなくなっていた。周囲の音が聞こえず、まるで戦争があって原爆を落とされたあとのよう。サイレンだけが聞こえていた。胸まで海水につかり、高台に行って、家族の無事を確認。

漁を再開しなくちゃ、と船や道具をかき集めて始めた。オキダコなどの軟体類や甲殻類は被曝が少ない。水深１５０メートル以上の魚種も汚染されていない。コウナゴもサイクルが早いので汚染がない。昨年６月から試験操業をはじめていた。

ところが、汚染水が漏れているということで、中断。９月以降再開の予定も延期されてしまった。漁をしないので魚は増えて大きくなっているが、獲れない。サンプル調査と言って魚は獲るが、捨てている。やるせない。何していいかわからない状況だ。世界三大漁場のひとつ、そこにあこがれ、魅力を感じて漁師になったのに、漁ができないのでは、楽しさやよろこびを感じられない。人間の手に負えないものを作ったからだ。すべてが原発のせいだ。

斉藤智英さんの話

当日は漁が終わって家で昼寝をしていた。妻と子ども３人は町に買い物に出かけていた。津波が来ると、真っ黒い煙があがり、目の前に家や車が流されてきた。父は船を守らなくてはと、沖に出た。助けてくれ、という声があちらこちらから聞こえてきたが、自分の身を守ることしか考えられなかった。

地震は来たが、津波は来ないだろうという予想では命を失う。また、助けに行こう、様子を見に行こうと戻った人たちが亡くなっている。しかたないが、まず自分の身を守ることが大切だ。

高校教師　大貫昭子さん

３月１１日は、南相馬市の小高工業高校に勤務し、入試判定会の最中だった。会議を中断し、車を校庭に移動した。野球部が活動していた。体育館に１５００人以上が避難してきた。

３月１２日にはコンビニから物が無くなっていた。午後には全員避難指示が出た。入試は全員合格の措置。しかし、その生徒たちは一度も校舎に入ることもなく、３年生になっている。

小高工業高校の生徒たちは、避難先からサテライトと言って５か所の学校に分かれることになった。教科書などの学習道具がない、部活動もできない、学校行事もできない。野球応援で結集する程度。

サテライト校では、その学校の生徒となるべく接触しないように配慮した。

教師も避難先からサテライト校へ出勤。音楽教師などは５校をまわるなどと言う事態も起きていた。

しかしサテライト校を一つに集約することになり、避難先での生活が始まっているので戻ることもできず、多くの生徒は転校することになった。

３０キロ圏内のすべての高校では、２０１２年以来の入学者は定員割れしている。

平和のうちに生存する権利、教育を受ける権利、職業選択の自由、居住の自由が保障されない福島。放射能におびえ、いつどうなるかわかない原発がまだそこにあり、自分の家に戻れず、狭い仮設住宅や知らない土地で生活し、それまでの地域や友人とも離れ、家族と共に自宅で過ごすこともできず、十分な教育も受けられず、就職場所もない。それが憲法で保障された人間らしい、文化的な生活なのだろうか。

生徒たちは当時のことを語らない。壁に津波がぶつかる音を聞いた、原発の爆発音を聞いたという生徒もいる。しかし、私にはあえて聞かない。聞きだす力はないし、傷を埋める力量がない。

救いは、生徒が、自分も先生になりたいと言ってくれたことだ。学校が楽しい、先生が楽しそうに授業をしている、という。学校に来れば日常に戻れるという感覚なのだろう。

他県に避難している息子は、子どもを連れて福島には戻らないと言う。しかし、私はここに生活しているんだけど。

ここで普通に暮らしている。その異常さが次第に分からなくなっている。福島のことを言うのはもういい加減やめよう、という雰囲気もある。なかったことにしたい連中が、再稼働をもくろんでいる。

しかし、二度と同じことを起こさないために、私たちはここにいる。